

むことになったのであるが、アッカード語では“牛”のことを“アレフ”と言ったので、“𐤀”は“アレフ”と読まれる字になったのである。

さて、アッカード人は、スメール文字を“仮借”してアッカード語を表記してみたのであるが、間もなくこの“表音的用法”では飽き足らなく思ふやうにたったものである。彼らは、生活が安定して居り、高い文化を有ってゐたからであらう。

彼らはとに角、スメール文字の全体に精通してゐたやうに思はれる。といふわけは、スメール文字の一字一字をアッカード語に翻訳し、スメール文字をアッカード語を表す“表語文字”にしてしまったのである。

初めは、「スメール文字のもつ“意味”を捨て、“発音”だけを借りる」仮借の用法を行つてゐたのであるが、その反対に、「スメール文字のもつ“発音”を捨て、“意味”の方を借りる」といふ用法を採つたのである。

例へば、“A”といふ字は、スメール文字においては“𐤀”といふ形で、角を生やした“牛の頭”の形を表した象形文字であつて、“牛”といふ意味の言葉を表した“表語文字”であつた。(ただし、“牛”のことをスメール語で何と言つたかはまだ解つてゐない。従つて、“𐤀”が何と発音されてゐたかは解らない)

さて、アッカード人は、スメール文字のもつ“意味”を借りて、“𐤀”をアッカード語の“牛”を表す文字にした。それで、これをアッカード語で読

“B”といふ字は、スメール文字においては“𐤁”といふ形をしてゐて、彼らの住む家の形を表した象形文字であつて、“家”といふ意味の言葉を表した“表語文字”であつた。(この字がスメール語で何と読まれてゐたか、スメール語で“家”のことを何と言つたかはまだ解らない)

アッカード人は、“𐤁”が“家”といふ意味の文字であることを理解すると、この文字も、アッカード語の“家”といふ言葉を表す文字にしてしまった。アッカード語では“家”のことを“ベート”と言つたので、“𐤁”といふ文字は“ベート”と読まれることになったのである。

このやうにして、アッカード人は、スメール文字を一字一字その意味を調べ上げ、スメール文字をアッカード語を表す“表語文字”にしてしまったのである。

先にも述べたやうに、“仮借”の場合には二、三十字も借りれば足りるが、この“表語文字”を作るのには、少なくとも二、三千字は必要であり、それは「全く新しい文字を創作すること」とほとんど変わらない大事業であつたに違ひないと思はれる。

それに興味深いことには、アッカード語はセム系の言語であるが、スメール語は日本語と同じウラル・アルタイ系の膠着語らしいことが判つ

日本語の再発見

てゐることである。然し、これには、未知の部分が非常に多い。このやうに言語の本質に違ひのある文字をアッカド人がどのやうにしてアッカド語を表す文字にして行ったか、今後のこの面の研究に期待するものは大きい。

よその文字を借りてこれを自国語の“表語文字”に作り変へてしまふことは「全く新しい文字を創作するのに劣らない大事業である」と言ったが、事実、この大事業を成した民族は、この広い世界で、この長い人類の歴史の中で、紀元前三千年のアッカド人と、七、八世紀における日本人と、ただこの二件しかないことで解る。文字を創作した民族は、スメール人、エジプト人、インド人、中国人とあるのに、こちらはアッカド人と日本人とだけである。「創作するのに劣らない」どころか創作するよりも難しい」と言ってもよいのではないだらうか。